ゆかりん、子育て始めるってよ

エスカルゴ・スカーレット

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

有事の際に備えて、自らの後継者を育成しようと思い立った妖怪の賢者、八雲紫。強き種族の種を得た彼女は、無事出産の時を迎え、優秀な医者の居る永遠亭にて、数日間入院していた。

そして、とうとう退院の日がやってきた。

ここからは、持てる知識を総動員し、優秀な子に育てよう…と張り切る紫だったが――――――。

※思い付きなのでそこまで深い話はないです。

※部活やめるってよみたいなノリやめろ（笑）

※慌てるゆかりんが書きたかったんです。

目　次

茜０歳編
ゆかりん、赤ちゃん迎えたってよ ―― 1
ゆかりん、たまにはのんびりするってよ ―― 7
ゆかりん、成長の早さに驚いたってよ ―― 11
ゆかりん、慌てまくって溺れたってよ ―― 15
茜４歳編
ゆかりん、実は親バカだってよ ―― 20
ゆかりん、旧友の愚痴を聞いてやるってよ ―― 23
ゆかりん、娘の成長を感じて寂しくなるってよ ―― 28
茜６歳編
ゆかりん、娘に名前をつけるってよ ―― 31

茜０歳編

ゆかりん、赤ちゃん迎えたってよ

　ここは幻想郷の南端、通称〝迷いの竹林〟内に建つ住居兼個人経営の医院、永遠亭。初冬のある日、数日前に出産を終えたとある妖怪が、医者の検診を受けていた。

「赤ちゃんも母体も、至って健康ね。予定通り、今日退院して大丈夫よ」

「そう…それは良かったわ」

　白衣を纏う医者…八意永琳は、その赤子と母親の八雲紫の検診を終え、「大丈夫」と結果を迅速に伝えた。当然、健康を願う母親はその言葉に安堵して、少し長めに息をついた。

　しかし、２人に健康と告げたはずの永琳の表情は決して明るいものではなかった。暫く検診結果のカルテとにらめっこした後、意を決したように、一呼吸置いてから口を開いた。

「ねぇ？その赤子……茜ちゃん、だっけ。やけにあなたの血が強いような気がするのだけど…？」

「……♪」

　永琳がそう訊ねても、紫は不敵に微笑むばかりで返事をしない。答えずとも、何となくはわかる。彼女が何もしていないはずがない、と。

「今までの彼の子供達って、見た目こそは母親に似てる事が殆どだったけど…中身までまるっきり母親だなんて前代未聞よ？」

「あら、そう？なら私が初めてね」

「父親も今ここに居るんだから、ちゃんと教えてあげたら？誤魔化したりして変に誤解されるのはあなたとしても本意じゃないでしょ？」

「まぁ、ね…」

　母親の腕の中で、スゥスゥと静かな寝息を立てて眠る赤子…茜を、母親らしい優しい目で見る紫。彼女が元々子供を欲しがった理由は「有事の際に備えて」という理由だったが、出産を経て多少は我が子に愛着が湧いてきたらしい。その目からは普段の胡散臭さをあまり感

じられない。
「…具体的には、どこら辺が似てないんですか?翼が無いのは分かりますが…」
　茜の父親…紫に種を提供し、これまでにも数人の子供達を育ててきた吸血鬼、エスカルゴは永琳にそう問うた。すると彼女は、一目カルテを見て、淡々と答え始めた。
「翼は無い、牙も無い、日光・流水等耐性有り、視力、反響定位(エコーロケーション)、再生力は共に不明。…こんなに吸血鬼要素薄い事ってある?まるでクローンよ。目の色だけは、母体と違って明るめの紅だけど。満月の夜だって吸血鬼化はしなかった。どこまで父親の血が薄いのかしら」
(吸血鬼要素薄めるんなら、俺である必要あった
　のか…?とてもそうは思えん…。どうも紫さんに弄ばれてるような気がするな……はぁ…)
「さぁ、運命の悪戯じゃない?」
「…まぁ、それは私の管轄外だから、これ以上は何も言うつもりは無いけどね。お大事にね。後は好きなタイミングで出ても大丈夫よ。あなたならスキマで帰るんでしょうけど」
「うふふっ、そうかもね」
　やれやれと言わんばかりに浅く肩を竦めた永琳はカルテを持って部屋を出ていき、その検診などを手伝っていた助手、鈴仙・優曇華院・イナバも、彼女に従って部屋を出る。
　その際、茜の父親…そして自分の彼でもあるその男吸血鬼に、小さく手を振った。
「…投げキッスとかしないの?」
「俺そんなキャラじゃないです」
「それもそうね。じゃあ、早速帰りましょうか。あなたにもお世話になったわ、ありがとうね」
「いえ、俺なんて全然。何回か…その…紫さんと交わっただけですし。それで、俺の役目って…」
「無いわ。ま…これからもよろしくね、とだけ。この子は私と藍で育てるから、あなたはこれから産まれてくる神の子と妖舞君、霊麗ちゃ

んの面倒見てなさい。そっちで手一杯でしょ？」
「そこまででもないですけど……分かりました、茜の事はそちら任せます…」
「どうしたのよ、そんなにしょぼくれちゃって。
私達(こっち)だけで育てると合意しての子作りじゃない。
　元より、私が後継者を育成したいが為にあなたに無理に種を強請(ねだ)ったのよ？」
「そーですけどね…経緯はどうあれ、俺の子でもある訳ですし、やっぱ育児には父親も…と思うんです。……でも、いつまでもグチグチ言ってるとみっともないですね、切り替えていきます」
「そうしてちょうだい。それじゃあ、またね」
「はい」
　優雅に微笑んだ紫は、茜を抱っこしたままスキマを開き、その中に姿を消した。シンと静まり返る部屋の中で、彼は紫の使っていた布団を片付け、生まれて数週間の長男の方へ向かった。

「おかえりなさいませ、紫様。必要な物資は全て取り揃えておきました」
　居間に直接スキマを繋げた紫は、九本の尾を持つ妖狐で、式神として使役している八雲藍の前に、少し疲れた様子で現れた。お茶を飲んでまったり過ごしていた藍だったが、主の姿を見るやすぐにその居住まいを正し、出迎えの言葉をかけた。
「ただいま、藍。お疲れ様、後はゆっくり休んで頂戴。忙しくなったら手を貸してもらうわね」
「分かりました」
　自分が不在だった間に、茜を迎える準備をさせた藍を休ませる為に下がらせて、未だに眠っている茜をベビーベッドに降ろす。しかし、母の感触が無くなった為か、降ろされた直後に目を覚ます。
「あうぅ～……う〝ぅ～っ…!!」
「え？えっ？ちょっと、何で今このタイミングで目ぇ覚ますのよ!?」
「う〝、わ〝、ぁあうぅぅ～…」

グズる茜を見て焦った彼女は、大慌てで娘を抱き上げ、言葉を掛けながらゆったりとしたリズムであやし始める。
「よしよし、お母さんはここでしゅよ〜！だから泣かないでね茜ちゃん〜！よしよし、よしよし…良い子だから、ゆっくり寝ましょうねー…」
「うぅ〜……スー…」
（…本格的に泣き始める前で良かったわ…）
妖怪の子は人間の子よりも成長が早い。吸血鬼や悪魔…といった上級の種族となると特にだ。茜はその吸血鬼の血を継いでいる。なので、入院期間中に首は座っているし、目はとうに見えている。まだハイハイまではいかないが、体を揺らしたり首を振ったりなどは普通に可能だ。
永琳曰く「人間と同じように考えてはいけない。動物が産まれて間もない内に立てるのと同じく、妖怪もそれなりに成長は早い」とのこと。人間と違って、妖怪は本来野生なのだから、永琳のこの言葉には紫も深く納得している。
（まずいわ…。茜ったら、降ろしたら泣くタイプなのね…。入院してた時みたいに、私も茜の隣で寝ていれば大丈夫なんだろうけど…流石にベビーベッドには入れないし……どうしたものかしら）
目尻に溜まった涙を指で拭ってやり、そんな事を考える紫。そうなると、茜を降ろして寝かすにはベビーベッドではなく布団である事が望ましい。
そう考えた紫は自室に行き、押し入れから片手で布団を引っ張り出し、娘と並んで横になる。傍に母の気配を感じているのか、よく眠っている。
（ふぅ……これで私も、少しは休めるかしら…。早速だけど、母親って随分と大変なのね…。少し甘く見てたかもしれないわ…。今の内にゆっくり体を休ませておきましょ…）
「んゞうゞうゞぅ〜〜〜……」
「へ？」
「あああぁぁ〜〜〜っ……」

娘の肌着から漏れ出してきた黄色い液体。それを見た紫は、顔を青くして悲鳴を上げた。
「きゃあああああああっ!!お漏らししてるー!藍!らぁぁぁん!!来てぇ!今すぐ来てええええ!茜がお漏らししちゃってるーーーー!!!オムツ仕事してないいいいっ!!!」
「紫様!!」
主の悲鳴を聞き付けて、すぐさま駆け付ける藍。彼女は茜の新しい肌着と換えの布団を用意する。
「あーん、もう…布団も肌着もびしょびしょ…。私の服まで少し濡れちゃったわ…」
「大丈夫ですよ、乳児の尿はそこまで汚くないといいますし。後は私に任せて紫様もお着替えを」
「ううん、着替える前にお風呂に行ってくるわ。茜のことも綺麗にしなきゃ」
「では、片付けとオムツの準備をしておきます」
「ええ、お願いね」

風呂にて娘を綺麗にして、自身も軽くシャワーを浴び、下着姿のまま部屋に戻る。片付けを終えたばかりの藍は、主の姿に目を丸くして慌てる。
「ゆっ、紫様!?お着替えはいつもの所に置いておきましたよ!?」
「もう今日は寝間着でいいわ…」
「えっ、まだお昼前ですが…」
「その方が都合が良いのよ。授乳とか。それに、後から着替える手間が省けるからね。ちょっと茜抱っこしてて」
「はい。オムツも付けておきますね」
「ううん、私がやるわ。慣れないとね」
「分かりました」
普段着とは違い緩い寝間着に着替え、藍から茜を受け取り、少し弱々しい笑みを藍に向ける。
「ありがとうね…今度こそ休んでてちょうだい」

「大丈夫…ですか？」
「オムツくらいは大丈夫よ」
「…分かりました」
　畳に茜を降ろし、藍の用意したオムツを履かせる為にオムツを広げ、茜の腰の下にそれを入れる。それを股の間に通し、腰骨の少し上のあたりで、粘着テープで留める。
「あぅ……はぅぃ？」
「ふふっ、新しいオムツよ、茜ちゃん♪」
「あいぃぅぁ～……」
「おしっこかな？でも、もう漏れないわよね♪」
「んぅ～……」
「……え？」
　オムツと肌の隙間から流れ出す液体。それは体を伝い畳を濡らし、徐々にその範囲を広げていく。
「きゃあああああああっっ!?!?なんでまた漏れてくるのよおおお!!らぁぁぁんっ!!不良品よこれぇぇぇ!!!!らぁぁぁん!!!!畳が濡れちゃったあぁぁぁぁっ!!どうしよう助けてらあああんっっ!!」
　すると、呼ばれた直後に部屋へと入ってきた藍。呼ばれることが事前に分かっていたかのような、凄まじい速さだ。
「落ち着いて下さい、紫様！オムツをしっかりと留めなかったからです、不良品じゃありません！どうかしっかりして下さい！」
「なんで履かせるオムツにしなかったのよぉっ！畳が濡れちゃったわよぉぉっ!!」
「オムツを買ったのは紫様ですよ!!私が買ったのはベビーベッド等の大きめの物です!!」
「そうだった何やってるのよ私の馬鹿ぁぁ!!」
「あぅ、うぅ～…うあああああぁぁぁん!!!」
「ああもうっ、落ち着いて下さい２人共っ!!」
　結局、身体を全く休められないまま、お昼の時を迎える事になってしまった紫達であった……。

ゆかりん、たまにはのんびりするってよ

複数に渡るお漏らし騒動を経て、どうにかお昼を迎えた紫達。藍が昼食を作っている間に、茜には母乳を飲ませ、完成してからは、茜を抱っこしたまま藍に昼ご飯を食べさせてもらった。

茜は、眠っている時に母から離れると泣き出してしまうタイプの赤子だ。入院していた頃とは違う環境なので、退院してやっとそれを知ったのだ。紫は内心で「折角ベビーベッド買ったのに…」と少し勿体なく感じてはいるが、無理に寝かせても泣かれるだけなのは目に見えているので、決して口に出して文句は言わないし、実行もしない。

「ごちそうさま。いつも通り、美味しかったわ」

「お粗末さまでした」

乳で腹が脹れた茜は母の腕でずっと眠っており、同じく昼食を摂って腹が脹れた紫も、大きく息をついた。

「やっと大人しくなってくれたわ。飲みっぷりもいいし、何だかいい感じじゃない？どうかしら」

「大人しくなったのは眠っているからでしょう」

藍は台所で食器を洗いながら淡々と言葉を返す。あまりにも当然な返答に紫は頬を膨らませ、少し投げやり気味で、答えが単調であることに対する不満も込めた言葉を返す。

「そんな事は分かってるわよ～…。でもこの子、いつまでこうして眠ってるのかしらね。それと、お漏らししないように、オムツの確認はこまめにしといた方が良いかもしれないわね」

「全く…紫様は慌て過ぎなんですよ。もう少し、落ち着いて事に当たっては？」

「ええ、分かってるわ…。分かってるんだけど、どうしてもね…。あーあ、まさかお漏らし如きであんなに慌てるなんて、末代までの恥ね」

「……」

「そこは否定してよぉっ！」

「あんまり大きな声は出さない方が良いかと…。起きてしまいますよ」

「それもそうね。…何か、私より藍の方が詳しくない？私の式になる前に育児経験でもあった？」
「いえ。ただ、自分が寝てるのに傍で騒がれたら誰だって起きるでしょうし…それは赤子も我々と同じだろうと思ったまでです」
「う…その通りね…」
　声量に気付かされた紫は、ボリュームを落とし、エプロンで手を拭きながら居間に戻ってくる藍に引き攣った笑みを向ける。
「あと、吸われてる時にわざとらしく声漏らすの止めて下さい。気が散ります」
「あら、気付いてた？うふふふっ♪」
「やはり意図的でしたか…」
「興奮しちゃった？」
「しないです」
「んもう…少しくらい興奮しても良いじゃない」
「…はぁ…」
「あー、今露骨にため息ついた～。酷いわねぇ」
「そういう事に興味は無いので」
　ツンと澄ます藍だが、その言葉は紛れもない本心である。紫はそれを分かってる上でカマをかけ、藍もまたカマかけである事を分かっていて軽口を叩いている。イラついていそうな口調の藍だが、紫がそれを咎めたり、藍がキレないのも、互いに軽口を叩きあっていることが分かってるからこそなせる会話だ。
「ちょっとトイレ行ってくるから、茜の事抱っこしててくれないかしら」
「分かりました、ごゆっくり」
　けれども、眠っている茜を藍に抱かせたその時。ピッタリ閉ざされていたはずの目が、パッチリと開かれた。そして目の前に母の顔を確認し、次に自分を抱き上げる藍という存在を確認した。
「「あっ……」」
「う〝……う〝ぅあぅぅぁあ～～っ…!!」
「いっ、急いで行ってくるからお願いねッ!!」

「お任せ下さい！」
…そこからはもう、茜が泣き出すのに時間はそうかからなかった。背を向けた途端に泣き出して、藍は慌ててあやすものの、全く意味を為さない。
落ち着いて事に当たってはどうかと進言した筈の藍だが、少しずつ焦りの色が表れ始めた。あやすためにガラガラを渡してみるも、妖怪に人間製のオモチャを渡しても、大して遊べないうちに破壊してしまう。変顔をしようと思いついた藍だが、羞恥心が勝り、中々実行に移せない。
「あぁもう、早く戻ってきて下さい紫様…！まだ私には荷が重かったようです……んぶっ!?」
藍の腕の中で暴れる茜は、藍の腹を蹴ったり顔を叩いたりと好き放題する。どうにかして大人しくさせたい藍だが、主人の子故にあまり手荒な事は出来ず、されるがままになっている。
「はいはいはいはい、お母さんが大急ぎで帰ってきたでちゅよ～！茜ちゃん茜ちゃん！お母さん、お母さん来たでちゅ～！」
「…！あぅあぁ～、たぁ～っ！」
わざとらしいくらいに高い声、満面すぎる笑み。けれども自分の子を落ち着かせるにはそれで十分だったらしい。現に、茜は笑みを覗かせて、母にその小さな手を伸ばしている。
「お～よちよち、お待たせちまちた～♪」
「助かりました、紫様…」
茜が紫の手に渡ると、茜は母の胸に顔をうずめ、再び眠りについた。それも、泣き疲れたからか、小さくいびきまでかいている。
「…ね？中々に大変でしょ…？」
「ええ、予想よりも遥かに……。何をしても泣き止まなくて、苦戦しました…」
「何故か私が抱っこしてると落ち着くのよねー…何でかしら。母親だから？」
「そうなんじゃないですかね…。そうじゃないと何か悔しいですし…」

「あらあら、正直ね。…じゃあ、このままここでお昼寝しましょうか…おなかいっぱいになったら私まで眠くなってきちゃったわ」
「すぐそばに居るなら茜も寝ますしね。１８時頃に起こしますよ」
「お願いするわ…」
　結局、そのまま畳に寝転がって、時間管理も含め家事などは全て藍に任せ、２人は束の間の休息をとり始めた。…だが、休める時間は本当に短く、すぐに子育てに奮闘する事になるのだった……。

ゆかりん、成長の早さに驚いたってよ

紫が自分の赤ん坊・茜を自宅に迎えてから、実に2週間ほどが経過した。最初こそオムツや授乳で慌てることも少なくなかったが、流石に、何日も経過すれば難なくこなせるようになった。

その甲斐あって、藍の負担も徐々に少なくなり、彼女は通常の業務に戻れるようにすらなった。

尤も紫は、元気な娘に未だに振り回されている。それが時に楽しく…また時に大変に感じることもあったが、彼女にとってはどれも新鮮で、楽しく感じられる時間であった。

…が、茜の生後1週間が経つ頃から、ヨタヨタと歩き始めた。それによって行動範囲が広くなり、必然的に紫はあちこちに動き回るようになった。多少身体が成長はしても中身は赤ん坊だ。見る物触れる物、全てに興味を示し家中を動き回った。

「しかし…見れば見るほど、茜は紫様にそっくりですね…。アイツに似ているのは目だけですか」

「そうねぇ…。何故ここまで私に似てるのやら。霊愛も霊夢に激似だし…どちらかに瓜二つになることも、有り得なくもないのかしらね？」

「ご冗談を。紫様のことです、なにかやらかしたのではありませんか？」

ややため息混じりに言葉を返す藍。それに対して紫は、わざとらしく答える。

「あら酷い。他人の子には手出ししないわよ？」

「ご自分の子には？」

「ま…ほんのちょっとだけ、ね♪」

遺伝子操作…若しくはそれに類することをやってのけたのだ。お得意の「境界弄り」で。何物にも境界は存在する。存在するのなら弄れる。たとえそれが、彼女の目に見えても見えなくても。存在そのものが能力の対象となり得る鍵なのだ。

それを察した藍は、少し肩を震わせた。そして、声すらも震わせな

がら、言葉を続ける。
「…紫様が恐ろしいです。生命の理に逆らう事も難なくこなせる、そのお力も…」
「理由があったの。エスカルゴに似てはいけない理由がね。いつか、あなたにも分かるわ。もしも理由を知りたいのなら気長に待ちなさい。そして茜をよく視るの。面倒という意味ではなくね…」
「本来は…どんな子に生まれてくるはずだったのですか？紫様が何もしなかった場合は…」
「んーとねぇ…紅魔館の吸血鬼…フランドールに近くなっていたかしら。能力の使い方も危険で…冷酷無比な暴走癖もあり…っていう意味で。彼に似るとヤバくなりがちだからねぇ」
「それが、弄った理由…ひいては、エスカルゴに似てはいけない理由…ではないのですか？」
「それもある、とだけ言っておこうかしら。ただ破壊するだけの暴走なら鎮圧は楽よねぇ。でも、この能力で暴走すれば……私の言わんとすることは、あなたならわかるわね？」
「はい。しかし、その暴走を未然に防ぐ以外に、生命の理に逆らうほどの大きな理由があるとは…到底思えませんが…」
「大丈夫、あなたは気長に待ちなさい。１０００年も待たせたりしないから」
「……」
　気長すぎる。長命な妖怪だからこその発想・発言だが、やはり気になるものは気になる。藍は更に追求しようとするが、紫の性格上、正解はきっと教えてはくれず、はぐらかされてお終いだろうと考え至り、追求することを諦めた。
「何週間か経ったし…そろそろ茜もまともに喋り始める頃かしら？」
「早すぎでは？」
「人と同じように考えちゃダメ。ある一定までの成長は早く、老化は極めて遅く…。これが彼の…いや、吸血鬼の血を継ぐ者の特徴らしいわ。まぁこれは、吸血鬼だけじゃなくて妖怪全般に言えることでもあるのでしょうけどね」

「確かに……近頃はちょっと返事しますしね…」
「でしょ？流石私の茜ちゃんだわ～♪」
そう、茜は返事をするのだ。保護者側がイエスかノーの二択で答えられる簡単な質問をして、茜がそれを理解した場合、何かしら反応を見せたり、返事をするようになった。
「茜、そろそろお腹空いてきた？」
「あぶぃっ！」
「そう、分かったわ♪」
元気に頷いた茜は、紫の母乳を欲して彼女の方に歩み寄る。それを見た紫は、茜を抱き上げて乳を飲ませる。多少身体が大きくなったところで茜はまだまだ赤ん坊だ。離乳食にはまだ早い。
茜が話し始めたのはそれから実に数日後の事だ。
紫と藍が話していたところに、歩いてきた茜が、これまでとは違う言葉を発したのだ。
「おかぁ…さんっ！」
「!?」
「しゃ…喋った……？茜…今あなた、喋った？」
「うんっ！」
ぱぁっと顔を輝かせた紫は、おもむろに茜を強く抱きしめる。あまりに突然の事に、抱かれた茜は目を丸くしたものの、普段母親に抱きついているのと同じように抱きつく。
「凄い…凄いわよ茜っ！偉い偉いっ♪」
「くるしーよぉ…おかあさぁん…」
「うふふ、ごめんなさいね♡」
「もー…」
若干頬を膨らませながら、彼女は母から離れる。一方で紫は、ニマニマと緩みきった頬はなかなか収まらない。
「早いうちから意思疎通が可能になる…これってすっごく楽よねぇ♪」
「いしそつー？」
「何故こうも言葉を覚えるのが早いのでしょう…それともこれが普通

なんですかね…？」
「そういえば、前に月の兎がドヤってたわね…。
『子供に話し掛けていくのも大事だけど、言葉を聞かせるのが何よりも大事。子供は、身近な人の会話を聞いて言葉を覚えるから』って……」
「成程…。つまり茜は、私と紫様の会話を聞いて言葉を学習していった、と。そういう事ですか」
「恐らくね…」
「あかね、おかーさん、らん……あと…だれ？」
「…？誰か他にいたかしら？」
「えーとぉ…」
「橙ですかね？前に連れてきた事がありますし」
「ちぇん…ちがぁう…」
「ますます分からないな…」
「もしかして…あなたのお父さんの事かしら？」
「あぁ…ちょくちょく話題に上がってましたし、そうかもしれませんね」
「おとーさん…って、なーに？」
「あなたのお父さんは、エスカルゴっていうの。今度会わせてあげるわね♪」
「それ！わたしいまあうっ！」
「えぇ？今はだーめ、藍とお仕事に行くからね。また今度にしましょ」
「やーだっ！いまがいーの！」
「コラコラ、ワガママ言わないの。ほら茜、もうお昼寝の時間よ？お母さんはいつも通りに、茜が寝てる間にお仕事終わらせてくるから。おうちでおねんねしましょうね♪」
「やだ！あかねねない！おとーさんにあうの！」
「…イヤイヤ期でしょうか？」
「…かもね…」
　意思疎通が可能になった娘と、早速ぶつかり合う事になってしまった紫は、娘を泣かさないようにどう言いくるめるかを考え始めた。

ゆかりん、慌てまくって溺れたってよ

「…う～ん…」
「どうしましょうか、紫様…。いっそ、茜の事も結界の見回りに連れていきます？」
「ダメよ藍、それはダメ。あまりに危険すぎる」
「ですよね…」
「あーうーのー！あかね、おとーさんにあうー！あってみたいのぉ！」
「お父さんに会う」と言って中々紫達の言う事を聞いてくれない茜。多少は話ができても、中身は赤ん坊そのもので、ワガママさはとんでもない。同じ言語こそ話すが、自我の中途半端な芽生えがこうも面倒な事になるのかと、紫は内心溜め息をついている。
「茜？もうお母さんは仕事に行かなきゃなのよ。いつも通りお昼寝しましょ？ね？」
「やーだー！おひるねしたくないー！」
「…参ったわね…」
「コラ。ワガママを言ってお母さんを困らせてはいけないぞ？大人しくお昼寝して待ってなさい。大きくなったらお父さんにも会わせてやるから」
「やだっっ!!」
「「……」」
　喋り始めたと思ったらこの有り様である。２人が繰り返し溜め息をつくのも、仕方の無いことだ。意思疎通が出来るようになった反面、このように娘とぶつかり合う事も、これから増えていくことだろう。しかし、多少の分別はつけさせなければならないと考えた紫は、茜の好きな玩具を出す。
「ほぉ～ら、茜ちゃんのだーい好きな、ガラガラでちゅよ～♪　ガラガラ～♪　ガラガラ～♪」
「……」
　ガラガラを揺らしてそんな言葉をかけるものの、茜からの視線は鋭く突き刺さるばかりで、興味を示してくれない。まるで言葉を覚えた

のと同時に性格までもが変わってしまったかのようだ。
「あかね、ねない！ねむくないもん！おかーさんねればいーの！」
「お母さんはこれからお仕事なのよ～…」
「ならあかねはおとーさんとあそぶっ！おはなししてみたいもん！」
「だーめ」
「なんでだめ!?あかねのおとーさん！」
「それはそうだけど…ねぇ…？」
　茜が納得出来そうな理由が思いつかない彼女は、藍に視線を向けて助け舟を求める。しかし、藍も適当な理由が思い付かないらしく、先程から頭を抱えてうーんうーんと唸っている。
「いーもん！あかね、おとーさんにあいにいく！おかーさんはどっかいっていーよ！」
「!?」
　まだ服の場所も教えていないにも関わらず、茜は自分の服が仕舞ってある場所へ向かって、適当な服を引っ張り出した。動けない頃から、紫や藍の動きを見ていて、ある程度の場所は把握しているらしかった。
「お、お父さんがどこに居るのか、どんな格好の人なのか、茜は知らないでしょう？」
「しってるもん！げんそーきょーでゆいーつの、おとこのきゅーけつき！」
「…っ！」
「あと、まえにおうちにきてた！わかんないけどあのひとでしょ！あかねのおとーさん！」
「……」
「どういう事ですか？茜が産まれてから奴が来たことは一度も無いはず…。まさか紫様、別な男を連れ込ん…」
「そんなワケないでしょ！何をそんなバカな事を言ってるのよ藍っ！」
「じゃあどうして、いつの間に奴をここに？」
「…こっ、この前はっ…その……えっと……／／／」

顔を赤くさせ、照れて指を絡ませる紫。しかし、藍と茜は同じようなジト目で主を…または母親を見つめる。そんな2人を見て、追求を逃れるのは不可能だろうなと判断した紫は、意を決して、2人に話すことにした。
「…あの時はちょっと……ムラムラ…しちゃってね…？」
「あっ……」
「…？」
察した藍は口元を手で押さえ、何の事か知らない茜は首を傾げて、暴露した本人は縮こまる。紫がそういった事を話すのは彼と霊夢以外では初めてなので、どうにも羞恥心が抑えきれないらしい。
「と、とにかくっ！お父さんに会うことは、まだ許せないわ！また今度にしなさい！」
「どーして！」
着替えが中途半端で、上下ともに下着姿の茜は、ドンドン足を踏み鳴らして苛立ちを露わにした。子供らしい地団駄に思わず頬を弛めそうになった紫だったが、ここでニヤケては意味が無いので、必死に真顔を作る。
「どうしてもよ。今、お父さんは凄く忙しいの。同時期に子供が3人も生まれたからね…」
「しかも次は守矢の巫女ですしね…」
「あぁ、そういえば早苗もだったわ…。神の子がどうなるのか、よく観察しなければ…」
「…？むずかしーこと、あかねわかんない！でもおとーさんにあうの！」
「ダメったらダメよ。もう少しだけ待ちなさい、あなたなら待てるはずよ」
「やだ!!」
「ワガママ言わないの！」
「やだっっ!!!」
一段と大きな声で叫ぶ茜。するとその場に多くの空間の歪み…スキマが発生し、様々なものが落下してきた。ナイフ、古びた壺、大量

の本、誰かの衣類、食材、そして水。
「きゃあああああああ!!!藍!らぁぁぁん!!どういう事なの助けてええええええええ!!!」
「紫様ぁぁぁぁ!!部屋が水浸しに!!このままでは家が腐って…あうっ、足が滑っ…ブクブクブク」
「藍、まずいわ!濡れた服が重くて動けな……」
「ブクブクブクブクブクブク……」
「ぷはっ……あぁぁもおおおおっ!!どうしてこうなっちゃうのよおおおおおおっっ!?!!もう嫌ぁぁ…ブクブクブク……」
完全に混乱する紫と藍。そして、大量のスキマの中から翼が生えた男が1人、瓦礫の山にポトリと物のように落ちてきた。
「うぉっ!?な、何だこれ、何だこれ!?何で俺紫さんちに居んの!?しかも部屋滅茶苦茶じゃん何だこりゃ?!」
「おとーさんきたぁ♡」
偶然?にも父親に巡り会えた茜は、キョロキョロ周囲を見回す父親に飛び付いた。が、状況がまだ分かっていない彼は、娘が普通にしゃべっていること、娘がびしょ濡れであることすら忘れ、ただただこの状況に困惑する。
「あ、茜?紫さんは?藍さんは?ていうか、この状況は何なんだ?痛っ、手になんか刺さった…。うわ、なんかツボ割れてる…」
「そんなことより、あかねとあそぼー?」
「お、おう…?それは別に構わんが、まず部屋を片付けてからな?」
「いーの!おかーさんがやってくれるからっ!」
「えぇ…流石に、こんなゴミ屋敷になってるのは見過ごせないぞ…」
「あかねがべつにいーっていってるからいーの!いっしょにあそぼ!おそといこ!おさんぽしよ!おはなししよ!」
「わ、分かった分かった…。茜ってば、よっぽど遊びたかったんだな…。そーだな…とりあえず、博麗神社にでも行ってみるか?」
「はくれー…じんじゃ?うん、いってみよー!」
「よし、行くかー」
(偶然とはいえ、本当に父親を呼ぶなんてね…。全く、茜ったら……能

力がこんなに早く目覚めるなんて、完全に計算外だったわ…。っていうか、引越ししなきゃかしらね…これはもうダメよね、家がダメになっちゃうわ……あ～も～……）

茜達が去っていったその後、スキマにて排水した紫は、藍と共にゴミ屋敷と化してしまった家中の片付けに追われることになった……。

茜４歳編

ゆかりん、実は親バカだってよ

「ただいまぁ～……。疲れたよ、お母さぁん…」
「おかえり、茜♪」
「おかえり」
　紅魔館で繰り広げられた、ある戦いから帰還した茜。彼女は帰宅するとすぐに畳に倒れ込み、疲労困憊した様子を見せる。藍は「大丈夫か…？」と訊ねるが、茜は黙って頷くのみ。紫は、心配するような素振りは見せず、ただ一言、こう訊ねた。
「魔界旅行選考会、どうだった？」
「負けちゃった…。全然勝てなかったよ」
「何ですって？茜が…全然勝てなかった…？」
「うん…」
「３人の中に入れなかったの？」
「うん…」
「そう……残念ね…」
　重苦しい空気が漂う。紫が溜め息をつく事自体は多々あれど、心から悲しそうで暗い顔をするのは珍しいなと紫と長年連れ添っている藍は感じた。そしてそれは、紫の娘である茜も同様だった。
「ごめんなさい…」
「大丈夫よ。茜は精一杯頑張ったんだものね…。見てなくても分かるわよ、それくらい。だって、そんなにボロボロなんだもの…」
「ん……」
「そっかぁ～…茜も負ける事があるのね…。何か新鮮ねぇ、こういうのって」
　茜に寄り添うように畳に寝転がり、ふっと笑みを零す紫。怒ってはいない、もう残念がっていないだろうと考えた茜も、少しばかり表情を緩める。
「そだね…」

「…悔しい？」
「悔しいよ…。魔界、行きたかったもん…」
「まぁあのお父さんの事だから、また別な機会に連れて行ってはくれるんでしょうけどね」
「うん、そう言ってた。でも…やっぱり、最初に行きたかったな…って思って…。お姉ちゃん達、すっごく強かったんだよ。巫月お姉ちゃんと霊愛お姉ちゃんで、私達皆を相手に無双してたし…」
「あの２人はズバ抜けて力が強いわよね～……。混血の力とでも言うのかしら、アレ。穹ちゃんもこれから大きく伸びそうで怖いわ…」
「私も混血…」
「そうね。大丈夫よ。あなたには、他の皆じゃあ味わえない、特別な経験をさせてあげようと色々考えてる所だから。ね、藍？」
「…ええ、まぁ…。それが何年後になるのかは、分かりませんがね」
「ほんと!?」
　勢い良く体を起こし、母と藍の顔を交互に見やる茜。藍はそれに対して黙って頷き、紫は脅しとも受け取れそうな、幼い子供にとっては真の意味が計り知れない、意味深な言葉を付け足す。
「でもそれには、あなたの成長が不可欠なのよ。強さの意味でも…精神的な意味でも…。何より、肉体的な意味の、ね」
「肉体的な…？おかぁ…さん……何か…怖い事、しようとしてる…？」
「怖くは無いわ。簡単に言うとね？健康に、強く優しく、スクスクと育ってほしいっていうだけ。だから…頑張ってね、茜♪」
「…うん…。私、頑張るよ…っ！」
　満足気に頷いた紫は、茜の頭にポンと手を置く。だが、手を離すと同時に再び不機嫌そうな表情になり、大きな溜め息をついた。
「…それにしても…茜が負けるなんて全く納得がいかないわね。誰か、何かしら汚い手を使ったんじゃないでしょうね？」
「それは無いもん…」
「戦績は？何勝何敗？」
「２勝５敗…」
「…妖舞くんと樹里愛ちゃんに勝ったのかしら」

「うん」
「霊麗ちゃんは…流石にキツかった？」
「イケそうだと思ったんだ。でも…力不足で…。その前の戦いで力を無駄に使ったからだなって、負けた理由はもう分かってるよ」
「あなたも、まだ力に振り回されているようね。霊麗ちゃんほどじゃないんだから、配分くらいは出来るようになりましょうね」
「はぁい…」
　その後、みっちりと力の使い方や応用方法などを教え込まれた茜。能力に関する事とはいえ勉強が嫌いな彼女は、勉強から逃げ出したくすら感じていたものの、強くなる為だと自分に繰り返し強く言い聞かせ、しっかり勉強に臨んだのだった…。

ゆかりん、旧友の愚痴を聞いてやるってよ

「ねぇ紗那(シャナ)ぁ～…天狗達のあのダラしなさは一体何なのよぉ？」
「儂とて憂いておる所よ…。よもや、幼子６人に我が天狗軍が蹂躙されようとは予想もしまいて」
「やだもう、『軍』なんて言い方…。幻想郷には合わないわよ」
「まぁまぁ、紫様…」

子供達が紅魔館にて寝泊まりをしている中、紫の屋敷では、先程行われたばかりの天狗と子供達の戦いについて紫と天魔が講評していた。が、その意見の大半は、ただの天狗達への愚痴であった。
「鬼が山に居た頃とか、もっとしっかりしてたと思うけどねぇ…。さっきなんて何よ、紗那が話をしてるのに、後ろの方ではお喋りしてみたりね。あれは無かったわ。正直言うと、子供相手にボコボコにされている姿を見て、スッキリしたわ」
「あれは酷かったのぅ…。見ていて辛かったよ。そして幼子だからと舐め腐っておった。…それであのザマじゃ。儂とて擁護しようがないほどに、ダラケておる。どうしたものかの、ゆかりんよ。エスカルゴとの決闘以来、厳しくしとるのだが」
「厳しくしててアレは無いわよ。もう天魔交代の時期かしらね？」
「おいおい…。が、長として必要な統率力が儂に無いのは認めよう。だからこそ、部下の大天狗は勝手に行動を起こして、問題に発展して…挙句の果てに山に災いを齎し…絶大な力を持つ吸血鬼や紅魔館の連中を敵に回してしまった。今でこそ、彼奴とは和解しておるが…正直、儂は不安じゃ。またあのような凄惨な事件が起こらないか…な。
あの事件に加担していなくとも反抗的な大天狗はまだまだおる…。ヒック……嫌なものよのォ…。これもまた、儂の力不足故か…」
藍の用意した酒に口をつけ、グチグチと己を卑下する天魔。それを聞き「まぁまぁ…」と繰り返し宥める藍と、何も言わず酒を煽る紫。
アルコールを摂取した２人は、その力も借りて、普段よりも饒舌に話を続けていく。
「…ま、紗那の統率力の無さはこれからどうにかするとして、と。今は

部下の方よ。いくら相手が吸血鬼の血を継ぐ子供6人とはいえ、白狼天狗と烏天狗が１０００人近く居たのよ？幻想郷が平和でもあれは酷すぎるわ」
「今回は白狼天狗が５００＋烏天狗が５００人、合計
１０００人じゃ。…こっそり後から参加させたから、表向きは７００人くらいじゃがの」
「あ、汚い。裏ではそんな手を使ってたのね？」
「儂ら天狗は、鬼とは違ってたまに嘘をつくぞ。そんなのは、今に始まったことでも無いだろう。
…それなのに、だ。それなのにあのザマだ…儂が頭を抱えるのも分かるだろう？人数を足したのは後半戦に突入してからだ…吸血鬼の血を引く子供とて、力や体力、共に消費はしておるはずじゃ。それでも、我が軍はあのように蹂躙されたのだ。赤子の手を捻るように。この意味が分かるか？」
「エスカルゴの子供達は絶大な強さだけではなく持久力もある。若しくは、あの天狗達がただ単に力不足だったから。…或いは、その両方かもね」
「両方だと思うよ、儂は…。のうゆかりん、また鬼を山の頂点に据えるというのはどうかの…？」
「鬼が山から居なくなって一番喜んでたのって、あなた自身じゃない。もうシメられなくて済む、もう無駄な酒盛りに付き合わなくて済む…って」
「あぁ、天狗の長だから毎度毎度引っ張りだこになっていたよ。それでも尚、部下共の気は今より引き締まっていた。少しでもダラけると、キツい拳が待っているからな。鬼の手加減の下手さは、ゆかりんとて知っておるだろう？肉体の強い妖怪とて散るぞ、アレは」
「…成程ね。幻想郷全体というより、鬼が消えたことによって、山の天狗社会は平和になったと。そういう事ね？」
「そうだな……平和になったという点では、特に否定はしまいて。訂正すると天狗社会というより山全体だろうな。麓の河童達も、昔よりもずっとイキイキしとるような気がしてならん」

「あぁ～…。にとりを筆頭に、着々と活動範囲を広げてるしねぇ。あの子、リーダー的なところがあるし…これからも活躍が期待出来そうね」
「そうじゃな。…もしも、河童が本気で反逆するなんて事になったら…今のダラケきった我が軍で対応できるのだろうか？出来ないような気がするのは儂だけかの？」
「子供に負けたからって不安になりすぎよ紗那。河童如きに負ける天狗じゃないでしょ」
「１２歳以下の幼子如きに負けた我が軍よ……」
「まぁ、水辺の近くでしか活動できないだろうし警戒には値しないでしょう」
「いいや…。ヤツら、川を捨て山童（ヤマワロ）になった事がある者もいるくらいだ…山の中でも十分、活動は可能らしい」
「へぇ……！」
「しかもサバイバルゲームと称して戦いごっこをしてたりする。その技術が実戦に生かされたら…考えただけで身震いがするわい。見慣れぬ武器に困惑し討ち取られる天狗達……。これでもかってくらい鮮明に想像できる。瞼の裏に浮かぶよう、という比喩がピッタリだな」
「ふーん…案外厄介そうねぇ。だけど、こうして身近の心配を出来るってことは、それだけ周囲が平和になった…ってことよねぇ」
「まぁそうとも言えるが…。儂はな、ゆかりん。別に天魔は儂じゃなくても良いと思っとるんだ。だからクーデターを起こされ地位を奪われようとしても、この天狗社会が崩れるくらいだったら、『はい、どうぞ』で地位を譲ろうと思っとった。
…が、脆弱なあの天狗共を見たら…なぁ。社会が崩れる恐れがあるからな、そう甘ったれたことも言ってられなくなった。参った参った…」
「え、急に何の話よ？支離滅裂で何言ってるのかよく分からないわよ。お酒飲みすぎ？」
「あ～？まぁ、つまりだなぁ…河童にすら下克上されかねない弱き天

狗共じゃあ、儂以外の誰かが長となろうとも今のような安定した社会の形態は築けないじゃろう…と思っての？仮に実力で儂を倒した者とて、社会をまとめられないだろうなと思ったのじゃよ」
「あぁ…そういう思考だったのね…。そういえば天狗社会、半ば実力主義な所があったわねぇ…。スペルカードルールは完全な実力主義を否定するものなんだけど…」
「仕方ないだろう、もしも今の幻想郷に合わせて天狗社会にスペカを導入してみよ。どうなる？」
「まとまりの無い天狗共じゃ…社会崩壊かしら。
『乱れる』ってレベルじゃ済まなそうよね」
「そう。儂が危惧しておるのはそれじゃ。だから儂自身がスペカを作らん事で下々に示しておる。本当なら、スペカ作って暴れたいんじゃがのぅ…社会を思えば、これも仕方あるまいて。射命丸や姫海棠…犬走…。外の社会に上手に溶け込もうとしておる者は、そちらに合わせて己を磨いておるようじゃがな。他にもおることじゃろう」
「そうねぇ…。まとまりがあるのって、あくまで紗那の周辺だけだものねぇ。文みたいに協調性があって、周囲に溶け込めるのってごく一部よね」
「ああ…。困ったものだよ、本当に」
　お猪口では足りないと思ったか、一升瓶を掴んで一気に酒を飲み干す。過去には鬼の酒盛り相手をしていただけあって、天魔もまた、蟒蛇である。
　一升瓶の中身を飲み干し、「ぷはっ」と息をつく天魔。紫はそんな彼女に追い討ちをかけるようにたった今思い出したある言葉を告げる。
「……今思い出したんだけどね？エスカルゴ、前にこう言ってたわ。『支配する者は自らの支配する物に使役される。だから俺は支配せず、ただ君臨する』…って」
「くははっ……まんま今の儂じゃないか……。社会を支配するために、その『社会』に使役され犠牲になっている今の儂だ…」
「紗那……」
「天魔様…」

度重なる苦労などからくる疲れからか、不幸にも涙を潤ませた天魔。しかしそれを袖で拭い、更に瓶を数本開ける。
「どれ、茜が帰ってくる朝まで飲み明かすぞ!!付き合え紫、藍!!」
「わ、私もですか…」
「はいはい、分かったわよもう。茜が帰ってくる前には帰ってよね?」
「あたぼーよ!」
…が、結局そのまま酔い潰れた3人は深い眠りに落ちてしまい…朝になって帰宅した茜に、醜態を晒すこととなってしまったのだった…。

ゆかりん、娘の成長を感じて寂しくなるってよ

ある日紫は、結界の見回りの仕事を藍に任せて、娘へ能力の使い方の指導をしていた。と言ってもマトモな使い方ではなく、ほぼ遊びと言える様なふざけた使い方ばかりだが…。

「うん、結構良いわね。何度も開き直さずとも、一発でピンポイントな場所に開けてるわ。もう、悪魔の館からのつまみ食いも楽ね♪」

「そうだね。でも、何だかなぁ…。お姉ちゃんの作った料理、勝手に食べちゃって良いのかなぁ。ちょっと罪悪感…」

「大丈夫大丈夫、一口程度ならバレないから♪」

「……。ところでお母さん。最近、私の身体が少し変なんだけど…何でかなぁ…？」

「変？何がどんな風に変なの？」

何も言わず胸に手を当てる茜。それを見て、何を言いたいのかを察した紫は、慎重に言葉を選んでそれに対する返事をする。

「茜。それはね、成長してるのよ。胸が少しずつ大きくなってきてるの。成長期はそんなものよ。服とかの刺激でも痛くなってしまうものよ。後であなたに合ったブラジャーでも探しておくわね。とびっきり柔らかい素材の物にしましょう。で、他の所は大丈夫なの？」

「たまにだけど…膝とかがズキッて痛くなる…。ていうか今も痛いし…」

「あらあら。成長痛だなんて、妖怪としては純粋なのに、妙に人間臭いわね。喜ばしい事だけど、あまり酷いようなら手放しでは喜べないわね…。でもまぁ…悪いことではないから、素直に自分の成長を喜びなさいな」

「成長しすぎだよ…。私の身長、お姉ちゃん達をみんな抜かしちゃったし…」

「まぁ！もうそんなに大きくなったのね！凄いわ茜ちゃん、凄い凄いっ♪」

「撫でなくて良いから…」

「あら、ごめんなさいね♪」

茜は数多い姉や妹達の中で6女で、見た目年齢は
１０歳～１３歳程度、実年齢は先日の誕生日で５歳になった。そして長女である巫月は見た目年齢１０歳程度で実年齢は１３歳。実に、８歳も離れている。そして、何故か見た目では茜が長女に見える。
とても奇怪な事だ。吸血鬼の血が流れているのは全員共通。それなのに茜だけ成長が早い。それも５歳になった辺りから突然にだ。まるで茜の中のスイッチがオンに切り替わったかのように。
「もう少しよ茜。もう少しその痛みに耐えれば…後は楽になるのだからね」
「うん…。でもさでもさ、地に足をつけてるのにお姉ちゃんを見下ろすのって、変な感じしたよ」
「身長では勝っていても力は負けてるのだから、くれぐれもあの子達を見下した発言とかはしないことね。それだけは気を付けなさい」
「分かってるよ、お母さん」
「それと、前に『他の皆じゃあ味わえない、特別な経験をさせてあげようと色々考えている』って言ったわね？」
「言ってたね。藍とその準備してるんでしょ？」
「ええ。でね、そろそろその準備が完了する時が来たわ。あなたのその成長が終わったら…全てを教えてあげる」
「…！」
「『あなたの成長も不可欠』…とも言ったわね？覚えてるかしら？」
「うん」
「だから、そのままスクスク元気に、健康に成長してね…。お母さんはそれだけで嬉しいから…」
「…うん…」
「あなたなら大丈夫。私も藍もそう信じてるわ。全てが上手くいくよう、ここで祈っているわよ」
「急にどうしたの、お母さん？まだその説明の時じゃないんでしょ？」
「そうよ。でも…私は茜ちゃんが大好きだから…私の元を離れてしまうのが、少し寂しくてね…。ふふっ、子供であるあなたに『精神的な成長』を求めておきながら、私の方はまだまだね…。子供って、本当

にいつの間にか成長してるものね…。エスカルゴの言う通りだわ…」
指の腹で何度か目元を拭う紫。「私の元を離れてしまう」の言葉に、彼女は怪訝そうな顔をする。親元を離れて生活するなんて、茜にとっては全く想像できないことだったからだ。
「お母さん…私に…何を経験させるつもり…？」
「お勉強よ。あなたしか味わえない特別な…ね」

茜６歳編

ゆかりん、娘に名前をつけるってよ

――――――そろそろ、「特別な経験」をさせてもらえる…いや、させられる日が近付いてきた。

茜本人が望んでいようと望んでなかろうと、明日からはそのように過ごすしかない。これはもう、決定事項なのだから…。

「私と藍で、ありとあらゆる準備は整えたわよ。だから、茜ちゃんは何も心配しないで、大人しく流れに身を任せてね」

「うん。…何だか寂しくなるね…」

「そうね…。もしかしたら、お父さんはそっちに行くかもしれないけど…接触する時はくれぐれも周囲に気を付けるのよ」

「分かってるよ、お母さん」

茜は明日から、幻想郷を出て外の世界で暮らす。と言うのも、紫は茜に見聞を広げてほしいのだ。未来の賢者として凝り固まった思想は良くない。

…それが紫の思想である。なので外の世界で生活して、見聞を広げ勉学以外の事も学んでほしい、と言う意味も含められている。

要は「外の世界へ留学に行く」という事である。

「確認するわよ。茜ちゃんは今何歳？」

「６歳」

「じゃ・な・く・て？」

「あっ…えっと、１８歳！で、今年１９歳になるの！

…あれ…合ってる？」

「そうそう。『設定』だけは何があっても絶対に忘れちゃダメよ？」

「はぁーい…」

これから留学生として学生生活を送るにあたって

「６歳」はおかしすぎる。ましてや彼女の見た目だけはほとんど大人なのだから。これは、紫が昔彼女に施した遺伝子操作モドキが関わっている。数が増えまくった腹違いの姉妹達と比べてみても茜の大人

らしさは飛び抜けている。長女の巫月はレミリア同様まだまだ幼女で、半妖の霊愛は少しばかり少女らしさが出てきた。生まれつき成体のここあ・シガレットは、相変わらず少女である。
　数年前までは赤子同然だったあのレイチェルも、今では普通の幼女になった。
「ちゃんと皆にお別れの挨拶は済ませてきた？」
「うん」
「お父さんにも？」
「勿論だよ。…泣かれちゃったけどね」
「あらら…。まぁ、エスカルゴにはギリギリまで隠しておきたかったからねぇ…急に知ったら泣くのも無理は無いかもね」
「隠してたのって…やっぱり反対されるから？」
「そう。お父さんは外の世界出身だからね、外の良い所も悪い所も、実際に見て聞いて、体験して知ってる。一部だけとはいえ…ね。だからこそ、茜ちゃんを外に行かせたくないと考えるだろうと最初から分かってたから…ある意味予想の範囲内かしらね」
「まさか泣かれるとは思ってなかったよ…。少し申し訳なくなっちゃった」
「あなたは優しすぎるわ。そういう所はやっぱりあの人に似ているのかもね」
「お父さん、優しいもんね。一部の人に対して…かもしれないけど、それでも私達にとっては凄く優しくて…良いお父さんだもん」
「…そうね」
　父親を泣かせてしまった事により、茜の心中には少しばかり暗い気持ちが芽生えてしまった。だがそれを払拭するかのように、父親をただただ褒めちぎる。それが、この会話を聞いてもいない父へ向けて、「悲しませてごめんなさい」と遠回しに謝罪しているかのように、紫の目には映った。
「いよいよ『外』かぁ…なんか緊張するなぁ…」
「なら『設定』の確認をするついでに自己紹介の練習してみましょっか。私相手に練習よ！」

パチンと可愛らしくウインクし、ガッツポーズをとる紫。藍は、相変わらず紫に任されて見回りの仕事中なので、現在は母娘2人きりだ。
「分かった。……留学生の八雲茜ですっ！日本の文化を学びに…」
「ちょっと待って」
「ん…？」
「留学生を名乗っておきながらガッツリ日本名はどうなのかしら…。本籍は外国にあるハーフっ子でも説明はつくと思うけど…」
「でも、色々と準備する時に『八雲茜』で手続きしたんじゃ…？」
「うっ……。そうだけど、そこら辺は力を使えばどうにでもなるのよ。コンピューターは私だって使えないことも…ないし…。いや、私というより藍の方が得意かも？」
「えぇ～…」
「そんな瑣末な問題は置いといてまずはこっち。問題は、『違和感をどうやって払拭するか』よ。説明はつくけど、少し難しいじゃない？」
「まぁねー…」
「それから、あなたの口調も少し幼すぎるから、そこにも気を付けないとね。大丈夫だろうけど」
「うん、口調の練習はしてあるから大丈夫だよ。
でも、どこ出身か聞かれたらなんて答えよう？」
「あーーーーー……在り来りだけど、アメリカで登録したのよね…。あなたはどこが良かったとかあるかしら？」
「ギリシャかなー」
本来なら、こういった手続きはキチンと相談して決めていくべきだ。しかしそうしなかったのは、茜は勉強をするのでいっぱいいっぱいだったからなのである。故に、準備は紫達がそれぞれ独断で動き…結果として、茜本人の意見とズレが生じてしまったのだ。
「あら、オシャレで良いわね。でもどうして？」
「小泉八雲…ラフカディオ・ハーンがギリシャの生まれだから、八雲繋がりでかな」
「流石、外の雑学系も勉強した甲斐が有るわね。良いわよ、あなたの国

籍はギリシャに書き換えておくわね」
「書き換えって…。ホントに大丈夫なの？」
「……」
　あからさまに宙に目を泳がせる紫。わざとらしく見えるが、表情筋がピクピクと動いていて、更に変な汗をかいていることから、恐らく本気で何かあるのだろう。
「お母さん？」
「…何でもないわ。絶対上手くやってみせる…」
「なんか不安になってきた…ハーフっ子設定でも良いんじゃないかなぁ…。実際にハーフだしね。吸血鬼と、通称スキマ妖怪との」
「ダメよ、やるからには徹底的にやらなきゃ」
「最初からそうしておけば…いや、お母さん達に任せっきりにしてた私のせいでもあるけど…」
「…せめて、食事の時とかにこういう話しておくべきだったわね」
「そうだね。でも、何とかなるんならそれで別に良いかな。細かい事気にしなくて済むし」
「そうね、そう思うことにしましょうか。あまり細かくしすぎると、後からボロが出たりどこかで矛盾が発生しかねないわ」
「うん。それじゃ、修正はお願いね。今は明日に向けて練習しないと」
「ええ、そうね。銀行の利用の仕方は覚えてる？振り込んでおいたお金で暫く暮らせる筈だけど…無駄遣いだけはダメよ？」
「覚えてるし、無駄遣いする心配は無いよ。娯楽には興味無いし、本は家から持っていくもんね」
「なら良いんだけど…。あと、変な男に騙されて買わされたりするんじゃないわよ？」
「そういう時はこっそり警察呼ぶもん」
「強姦魔とか痴漢が現れた時は…」
「スキマで野良妖怪の前に送る、でしょ」
「そう、分かってるわね。くれぐれも、殺してはダメよ。今の外の世界は科学が発展してるから、どんな方法で足がつくか分からない」
「もー、お母さんったら心配しすぎっ！」

「そう…？それなら良いんだけどね……。あと、提出物は絶対に期限を守ること！」
「分かってるってばぁ…そんなの基本じゃん…」
　幾度と無く繰り返される紫からの注意事項に茜は若干呆れ気味になっている。しかしこれは、父に負けず劣らず自分を心配してくれているからこそ、こうも注意してくるのだと分かっている。だから、呆れつつも一応返事はするのだ。
「あっ。修正する時ってさ、日本名じゃない方にするんだよね？なんて名前にするの？」
「そうね……修正する手間や時間も考慮すると、今すぐに決めないとダメそうね…。ん～……」

　暫く腕組みをして悩みに悩んで、悩み抜いた紫。
　しかしその数分後、思い切ったように顔を上げ、茜に新しい名前を授けた。

「明日からあなたは…マエリベリー・ハーンよ」